

妙法蓮華經。授學無學人記品。第九。

にーじーあーなん らーごうらー にーさーぜーねん がーとう
爾時阿難。羅睺羅。而作是念。我等
まいじーしーゆい せつとくじゆーきー ふーやッけーこー
每自思惟。設得授記。不亦快乎。
そくじゆうぎーきー とうおーぶつぜん ザーめんらいそく
即從座起。到於仏前。頭面礼足。
くーびやくぶつごん せーそん がーとうおーしー やくおう
俱白仏言。世尊。我等於此。亦心
うーぶん ゆいうーによーらい がーとうしよーきー うーがー
有分。唯有如来。我等所歸。又我
とう いーいっさいせーけん てんにんあーしゆーらー しよー
等。為一切世間。天人阿修羅。所
けんちーしき あーなんじよういーじーしゃー ごーじーほうぞう
見知識。阿難常為侍者。護持法蔵。
らーごうらー ぜーぶつしーしー にやくぶつけんじゆー あー
羅睺羅。是仏之子。若仏見授。阿
のくたーらーさんみやくさんぼーだいきーしゃー がーがんきーまん
耨多羅三藐三菩提記者。我願既滿。
しゆうもうやくそく
衆望亦足。

そ とき あーなん らーごらー しか こ ねん な
爾の時にー阿難・羅睺羅、而もー是の念をー作さく
われらーつね みずかー しーゆい もー じゆき
ー、我等毎にー自らー思惟すらくー、設しー授記
えー まーたーこころーよ すなわー ざ
をー得ばー亦 快からずやー。即ちー座より
た ぶつぜん いた ザーめん みあしー らい
ー起つてー仏前にー到りー頭面にー足をー礼し
とも ほとけー もう せーそん
ー、俱にー仏にー白しーてー言さーくー。世尊、
われらーこゝ おい まーたーぶん たーだーによーらい
我等此にー於てー亦分あるべーしー。唯 如来
われらー われらー とこころー
のーみーましましてー我等がー歸するー所な
まーたーわれらー いっさいせーけん てん にん
りー。又我等はーこーれー一切世間のー天・人・
あしゆらー ちしきー あーなん つね じしやー
阿修羅にー知識せらるー。阿難はー常にー侍者と
ほうぞう ごじ たらーごらー こー
ーなつてー法蔵をー護持すー。羅睺羅はー是れー
ほとけー こ もー ほとけーあーのくたーらーさんみやくさん
仏のー子なりー。若しー仏阿耨多羅三藐三
ぼーだい きー さず わー ねがいすて
菩提のー記をー授けーらればー、我がー願既にー
まん しゆう のぞみまーたーた
満じーてー衆のー望亦足りなん。

【現代語訳】

まさにその時、阿難尊者と羅睺羅尊者もまたこのような思いを抱きました。

「わたしたちも各々常にこのように思っていました。もし将来仏となる約束を得られたなら、なんと素晴らしいことでしょう」と。

そして立ち上がって、仏のみ前に到り、その御足を自らの額につけて礼拝し、共に仏にこのように申し上げました。「世に尊ばれるお方よ、わたしたちにも、ここにおいてまさにそれ相応のものがいただきたいと思います。」

わたしたちの基とするところは如来のほかにあります。

またわたしたちは、一切の世間において、天人や人々、また阿修羅たちにも自分の名を知られる者です。

阿難は、常に仏の侍者となつて、仏の教えを護つてまいりました。

羅睺羅は仏の実の息子であります。

もし仏が、わたしたちに、この上ない正しい悟りに到れるとの約束をしてくださったなら、わたしたちの願いが果たされるのみならず、諸々の衆生にも、成仏の望みが開か

れることになるでしょう。」

★ 阿難・阿難陀（アーナンダ）

の略。歡喜という意。釈尊と同じく釈迦族王族の子で提婆達多の弟。釈尊が悟りを開いた夜に生まれたとされる。十大弟子の一。多聞第一。經典の全てに「如是我聞」（かくの如く我聞きき）という言葉が冒頭に使われるが、この我とは阿難尊者のこと。釈尊の布教の旅に常に侍者として付き従った。

★ 羅睺羅・ラーフラ。釈尊の実

の子。ラーフラとは障碍の意。釈尊の出家の障碍との思いが名になってしまった。十大弟子の一。密行第一。

爾時に學が無く學が。聲聞しやうもん弟子に二千人に。皆か從い座じゆうざ起き。偏袒へんだん右肩うけん。到と於お仏前ぶつぜん。一心いつしん合掌がっしやう。瞻仰せんごう世尊せそん。如に阿難あなん。羅睺羅らごら所願しよらん。住じゆう立り一面いちめん。爾時に仏告ぶつごう。阿難あなん。汝に於お來世らいせい。當得とうとく作さ仏ぶつ。号ごう山海慧せんがいえい自在じいつう通王つうおう如來に。應おう供ぐ。正偏知しやうへんち。明行足みやうぎよく。善逝ぜんせい。世間解せけんげ。無上士むじやうじ。調御丈夫ちやうごじやうぶ。天人師てんにんし。仏ぶつ。世尊せそん。當供養とうくやう。六十二億ろくじゆうに諸しよ佛ぶつ。護持ごぢ法藏ほうざう。然後得ねんご阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんみやくさんぼだい。教化きやうけ二十に千萬億恒河沙じゆうせんまんのくごうがしや。諸菩薩等しよぼさつとう。令りやう成じやう阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんみやくさんぼだい。

爾そのときに一學がくむ無く學がくの一聲聞しやうもんの一弟子でし二千人に、皆み從な座ざより一起たつて一偏ひとえに一右みぎの一肩かたを一袒あらわにし一、佛ぶつ前ぜんに一到いたり一一心いつしんに一合掌がっしやうし一世尊せそんを一瞻仰せんごうし一て一、阿難あなん・羅睺羅らごらの一所願しよらんの一如ごとく一に一し一て一一いちめん面に一住じゆう立りせ一り一。爾そのときに一佛ほとけ、阿難あなんに一告つげたまわ一く一、汝なんじ來世らいせいに一於おいて一當まさに一作さぶつ佛ぶつする一ことを得うべし一。山海慧せんがいえい自在じいつう通王つうおう如來に・應おう供ぐ・正偏知しやうへんち・明行足みやうぎよく・善逝ぜんせい・世間解せけんげ・無上士むじやうじ・調御丈夫ちやうごじやうぶ・天人師てんにんし・佛ぶつ・世尊せそんと号なづけん。當まさに一六十二億ろくじゆうにの一諸佛しよぶつを一供養くやうし一法藏ほうざうを一護持ごぢし一て一、然して一後のちに一阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんみやくさんぼだいを一得うべし一。二十に千萬億恒河沙にじゆうせんまんのくごうがしやの一諸もろもろの一菩薩等ぼさつとうを一教化きやうけし一て一、阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんみやくさんぼだいを一成じやうぜしめん。

【現代語訳】

その時、未だ修行中のものと、すでに修行を果たした二千人の弟子とが、皆、立ち上がって、共に右の肩をあらわにして、仏のみに到り、心を一つにして合掌し、世に尊ばれる方を敬いの心で仰ぎ見て、阿難尊者と羅睺羅尊者の思いの如くに、立ち並びました。

そこで仏は阿難尊者にこうおっしゃいました。

「阿難よ、もちろんお前もまた将来仏となることができ
るのだよ。」

その仏の御名は、山海慧自

在通王如来（山や海のような大きな智慧が自在に通じる王）、供養に値する者、正しき悟りを得た者、智慧と行いを完成させた者、善き悟りに達した者、世をよく理解した者、この上なき者、よく衆生を導く者、神々と人々の師、仏、世に尊ばれる者という。

阿難よ、お前はこれから六十二億もの諸々の仏に付き従い、その教えを護り伝え、その後、この上ない正しい悟りに到るであろう。

そして二十千万億ものガンジス川の砂粒の数に等しい無数の菩薩を教え導き、彼らを

してまたこの上ない正しい悟りに到らしめるであろう。

★学無学…「学」とは修学中の者。「無学」とは学業を終えたもの。修行者と修行をすでに終えたものの意味。世間の意味とは逆になる。

★偏袒右肩…へんだんうけん。右の肩をあらわにすること。古代インドの礼法で、王に敬意を表すもの。

★恒河沙…ごうがしや。「恒河」とはガンジス川。「沙」は砂。インドで聖なる川とされるガンジス川の砂粒の数ほど多いこと。砂は赤土で、粘土のように細かい。ガンジス川は実際の人々の生死の象徴。

こくみようじょうりつしょうばん　ごーどーしょうじょう
 国名常立勝幡。其土清淨。
 るーりーいーぢー　こうみゆうみようおんきーまん
 瑠璃為地。劫名妙音氣滿。
 ごーぶつじゆーみよう　むーりようせんまんのく　あー
 其仏寿命。無量千万億。阿
 そうぎーこう　にやくにんのーせんまんのく　むー
 僧祇劫。若人於千万億。無
 りようあーそうぎーこうちゆう　さんじゆーきようけい
 量阿僧祇劫中。算数校計。
 ふーのうとくちー　しょうぼうじゆうせ　ばいおー
 不能得知。正法住世。倍於
 じゆーみよう　ぞうぼうじゆうせー　ぶーばいししょうぼう
 寿命。像法住世。復倍正法。
 あーなん　ぜーせんがいえーじーざいつうおうぶつ
 阿難。是山海慧自在通王仏。
 いーじつぼう　むーりようせんまんのく　ごうがー
 為十方。無量千万億。恒河
 しゃーとう　しよーぶつによーらい　しよーぐーさんだん
 沙等。諸仏如来。所共讚歎。
 しょうごーくーどく　にーじーせーそん　よくじゆう
 称其功德。爾時世尊。欲重
 せんし　ぎ　にーせつげーごん
 宣此義。而説偈言。

くに　じょうりつしょうばん　なつ　そ　どーしょうじょう
 国をー常立勝幡とー名けー、其の土清淨にーし
 るり　ち　こう　みようおんへんまん　なつ
 ーてー瑠璃をー地とせん。劫をー妙音遍滿とー名
 けん。其のー仏のー寿命無量千万億阿僧祇劫
 そー　ほとけー　じゆーみようむーりようせんまんのくあーそうぎーこう
 なーらん。若し　人千万億無量阿僧祇劫のー中
 も　ひーとーせんまんのくむーりようあーそうぎーこう　なか
 ー於てー算数校計すともー知るこーとー得るこ
 おい　さんじゆーきようけい　し　う
 ーとー能わーじー。正法世にー住するこーとー
 あた　しょうぼうよー　じゆう
 じゆーみよう　ばい　ぞうぼうよー　じゆう
 寿命にー倍しー、像法世にー住するこーとー
 まーたーしょうぼう　ばい　あーなん　こー　せんがいえーじーざいつうおう
 復　正法にー倍せん。阿難、是のー山海慧自在通王
 ぶつ　じつぼう　むーりようせんまんのくごうが　しやとう　しよぶつ
 仏はー、十方のー無量千万億恒河沙等のー諸仏
 によーらい　とも　そー　くどくー　さんだん　しょう
 如来にー、共にー其のー功德をー讚歎しー称せ
 え　そ　とき　せーそん　かさ
 ーらるるーことをー為ん。爾の時にー世尊、重ねー
 こ　ぎー　のー　ほつ　げ　と
 てー此の義をー宣べんとー欲しーてー、偈を説いて
 のたま
 ー言わくー、

【現代語訳】

その仏の世界は「常にすぐれた旗印が立つ国」と呼ばれ、その大地は清らかで、ラピスラズリからなっているだろう。

その時代を「素晴らしい音が満ちあふれた時」と呼ばれ、その仏の寿命は、はかることもことができないほどの長さであろう。

もし、人が同じようにはかることができないほどの長きに亘って、その仏の寿命を計ってみようとしても、さらにその寿命はさらにはかりきれないほどの長さであろう。

その仏が亡くなった後、そ

の正しい教えはその寿命の倍の長さほど世に保たれ、その後、その教えの形はまたその倍の長さほど世に伝えられていくであろう。

阿難よ、山海慧自在通王という仏は、東西南北四維上下の十方の千万億ものガンジス川の砂粒の数に等しいはかることができないほどの諸々の仏によって、共にその功德を讃えられるであろう。」

その時に、世に尊ばれる方は、重ねてその意義を伝えようと、詩にしておっしゃいました。

★ 阿難尊者のエピソード：或る夜

のこと。阿難尊者が瞑想をしている時、口から炎を吐く恐ろしい餓鬼が現れ、「お前は三日後に死ぬ」と告げた。

続けて餓鬼は「明日中に全ての餓鬼のために飲み物食べ物を用意せよ。そうすれば、自分も天に生まれ変わることができ、お前の寿命ものびるだろう」と言った。翌日、阿難尊者は釈尊に「施餓鬼という供養の方法」を授かり、それ行くと一鉢の食物が無量の飲食となつて、全て餓鬼の飢えを満たし、阿難尊者の寿命も延びた。お施餓鬼の由来。

★ 幡・ばん。旗のこと。仏や菩薩を供養する時に用いられる。

がーこんそうちゆうせつ

我今僧中説

とうくーようしよーぶつ

当供養諸仏

ごうわつせんがいえー

号曰山海慧

ごーこくどーしよーじよう

其国土清浄

きようけーしよーぼーさつ

教化諸菩薩

ぶつーだいーいーとく

仏有大威徳

じゆーみようむーうーりよう

寿命無有量

しよーうぼうばいじゆーみよう

正法倍寿命

によーごうがーしやーとう

如恒河沙等

おーしーぶつぼうちゆう

於此仏法中

あーなんじーほうしやー

阿難持法者

ねんごーじようしよーがく

然後成正覚

じーざいつうおうぶつ

自在通王仏

みようじようりつしよーばん

名常立勝旛

ごーしゆーによーごうじやー

其数如恒沙

みようもんまんじつぼう

名聞満十方

いーみんしゆーじようこー

以愍衆生故

ぞうぼうぶーばいぜー

像法復倍是

むーしゆーしよーしゆーじよう

無数諸衆生

しゆーぶつどういんねん

種仏道因縁

われいーまーそうちゆう

我今僧中にーしてー説くー

しよぶつー

にー諸仏をー供養しー

じよう

をー成ずべしー

ばん

幡とー名けん

そー

其の数恒沙のー如くーならん

しましてー

名聞十方にー満ちー

ゆえ

故にー

正法寿命にー倍しー

ばい

一倍せん

衆生

縁をー種えん

あーなんじーほうしやーまさ

阿難持法者

しーこう

にー後にー正覚

な

をー山海慧

そー

其のー国土清浄にーしてー

ぼさつー

諸のー菩薩をー教化するこーとー

みー

名聞十方にー満ちー

あわれ

衆生をー愍むをー以てーのー

ばい

正法寿命にー倍しー

むしゆ

無数のー諸のー

ぶつぼう

於此

【現代語訳】

「わたしは今、お前たち僧侶や仏の教えを護り伝えるものたちに向けて説こう。

仏の教えを護り伝える阿難よ、お前はこれより諸々の仏を供養し、やがて正しい悟りを成し遂げるであろう。

その仏の御名を山海慧自在通王如来（山や海のような大きな智慧が自在に通じる王）という。

その世界は清らかで「常にすぐれた旗印が立つ国」と呼ばれるだろう。

諸々の菩薩を教え導くことは、その数、ガンジス川の砂

の如くはかりしれない。

その仏は大いなる威厳と徳を備え、その御名は全世界に響きわたり、寿命の長さもはかりしれないだろう。

諸々の衆生を憐れむが故に、仏の亡くなった後も、その教えは寿命の倍の長きに亘って正しく保たれ、その教えの形はまたその倍の長きまで連続と世に伝えられていくだろう。

そのような中で、ガンジス川の砂粒の如きの数限りない衆生が、その仏の教えによって、仏となる道を歩むきっかけを手に入れることができるであろう。」

★ 僧中説…僧の語源はサンガ、

仏教教団全体を表す。仏は全仏教徒に向かって説いている。

★ 阿難尊者のエピソード…釈尊の

養母である摩訶波闍波提は、浄飯王の死後、釈尊に出家の三度許しを求めたが許されなかった。そこで摩訶波闍波提ら女性たちは、自ら剃髪し、修行場の門前で大声で泣いていたという。それを阿難尊者が見、仏に再び三度願い出たが許されなかった。最後に「もし女性が修行すれば、男性と同じ結果を得られるか」と問うと、釈尊は「得られる」と答えた。このことで、阿難尊者は釈尊に女性の出家を認めてもらったとのこと。